
転生者の被魔師

不純の道化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者の被魔師

【Nコード】

N5922X

【作者名】

不純の道化

【あらすじ】

これはよくある転生ものの死にかたで死んで転生した兄妹の物語です。

まったくもつての駄文です、突然やめるかもしれませんが、作者は原作を持っていません、それでも良い方は読んでくれると嬉しいです。作者は最近青エク全巻買いました。

プロローグ（前書き）

読もうと思ってありがとうございます、不純の道化です。

書きかけの小説をやめたその日に新しい小説を書いた大馬鹿者です。

では本文です。

プロローグ

?? ? ? ? SIDE

俺はさつき死んだ。

別段珍しい死にかたではない、飲酒運転の車にはねられ死んだ。変わっているところと言ったら歳がさほど離れていない妹と死んだことだろうか、まあとりあえず。

「知らない天井だ」

「うーん、君といい君の妹といいもうちょっと驚いてくれないかな？」

なんか小さいのがしゃべりかけてきた

「誰だお前？」

「スル ！？え？え？死んだはずなのに誰かにしゃべりかけられたのに華麗にスル ！？」

騒がしいな、この低身長 минимумは

「ま、まあ私は神様だ！（エッヘン）」

神？このチツこい女みたいな容姿のが？無い胸張ってるし

「そうか、で、神様とやらが何の用だ？」

「え！？神様にあつたのに拜むわけでもなく、何するわけでもなく拳句の果てには敬語さえ使わない！？初めてだよこんなの！」

五月蠅いな、ん？何か重いぞ？

「ああ、今妹さんが上にのっかているからそれで重いんだと思うよ」

「そうか、さつきの質問に関してだが俺は神様なんか無責任な人間が作り出した愚像的なものにしかすぎず、もし入ようがそこまで絶

対的な力は無いと思っっているからな」

「うーん、たしかにそのとうりなんだけどね。そつだそつだ、二番目の質問だけどね」

二番目の質問？ああ、あれか

「すみません、あなた達を間違えて不幸な人生に追いやつた挙句殺してしまいました。お詫びとしては何ですがあなた達を青エクの世界に転生させてあげてあげます」

・・・

「殺すぞテメえ」

お、妹がしゃべつた。

「すみませんすみません、メンゴメンゴ、代わりに能力とかつけてあげるから許してください、そうしないと上にはばれて怒られるんだよ」

思い気つし、自分の保身のためだなこりやでも、まあ、悪くはないな。

「どんな能力だ？」

「望むならチートでも、奇跡の右でも、賢者の石でも、不老不死でもあげるよ？」

うーん、そこまでだとなー。つーか全部チートじゃね？

「ちなみにあなた達がどうあがこうが原作ブレイクはできないからね」

まあ、いいけど。

「決めるからちよつと待つて、ほらお前も一緒の考えるぞ」

「はい、どんなのがいいかなー、あいつを殺す能力とかはどうだろつ」

わざと声に出してるなこいつは

「ひいつ!」

ビビるなよ・・・っーか拒むことはできんのか?

十分後

「よし決めた!」

「私も!」

うん、一緒に言おうと画策していたんだなこれが

「ど、どんな(ビクビク)」

まだビビってるよ。

「手騎士^{テイマー}の才能、出せるのは狐妖怪全般、もちろん白面金剛九尾もな。あと騎士^{ナイト}の才能もな、魔剣をつけてくれると嬉しい。それから勉強の才能は今のままでいいや」

コンだけありやあ十分

神「え?それだけ?そりゃあ、強いけどたったそれだけでいいの?」

「俺はな、妹のも聞いてやれ」

「う、うん(ビクビク)」

だからなぜビビる?あそつか、神の二言は禁忌だっけ?

「私はお兄ちゃんと一緒に手騎士^{テイマー}の才能、出せるのは狸妖怪系全般。もちろん陰神刑部狸もね。あと竜騎士^{ドラグーン}の才能もね、銃も付けといてあとは勉強の才能も今のままでいいし、まあこれくらいで許してやるよ」

「ありがとっございます(土下座)」

中三の女子中学生が神をひれ伏してる光景。うーんシュールだ

「ああ、両親だけど青い夜で死んだ上一級被魔師で学校はもちろん正十字学園、被魔塾にも通っているし、妹さんの方は特別に被魔塾にはお兄さんと一緒に通ってる、お兄さんは奥村燐と一緒にのクラス、もちろん希望どりの才能、武器、あと私からのささやかなプレゼントをあげるよ。これでいい？」

「おい、ささやかなプレゼントって何だ？
とんでもないものじゃないよな？」

「えーと、あれだ、人脈かな。それと、とある魔術の禁書目録の魔術の才能、あ！ちなみに才能は全部努力しないと開花しないからね」
それならいい、苦労はある程度した方がいいしね。

「それから、今の名前は忘れてもらうよ、記憶もあいまいになるから」

転生の意味ねーじゃねーか！？てか床に穴！？

「逝ってらっしゃい。おつと間違えた行ってらっしゃい」
ニタニタ笑うな　！！！！

プロローグ（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
明日も投稿すると思います。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

登場人物紹介（前書き）

今回は人物紹介です。

では本文です。

登場人物紹介

かみき
神木 八神

本作の主人公、青い夜で生き残った母親の実家が神木家だったためこの名字になった。つまり出雲とはいとこ。

転生前の記憶があいまいで確実に覚えているのが自分と妹が転生者で、神にあつた事、転生前の両親が強盗に襲われ死んだ事、そしてその強盗を殺した事だけは、はっきりと覚えている。

外見は目が常に不機嫌そうなのを除けば整っており、背も高い方には入る。

勉強は転生前からかなりできており正十字学園に特待生として入れているほど。

性格は表面上は良い部類にはいるが本質は破綻しきっておりすべての事柄を設定としか見ていない。がこの性格はのちに少しずつ改善されていく。

魔術はルーン、特に炎をよく使う。エクソシスト達には使い魔の一種とみられている。

魔剣 贄殿遮那

常に強者を求めており、また自分自身が強者と認められた者にしか従わない。

過去に自分を従えた被魔師の闘い方を使い手に教える事が出来る。

自分を従えた者の長男がいる限りは悪魔に戻らない。（それでも強い意志がなくてはいけないが）

本作では悪魔の力の無効化、及び使い手の使い魔との一時的な融合による属性の追加が能力となっている。（ルーンの炎もまとわせることが可能）

使い魔

狐妖怪全般を扱える、神木家では稀代の天才として扱われているが本人はたいして何も思っていないようである。

ルーンによる炎もこちらでは使い魔の一種という認知である。
応用として灼眼のシャナの炎髪灼眼の討ち手の自在法も使える。

天目一個

史上最悪の悪魔と被魔師^{エクソシスト}、悪魔双方から言われた悪魔。
姿は灼眼のシャナに出てくる天目一個と同じ。

贄殿遮那に今は憑依しているが持ち主が望めばこの世に具現化する。

神木^{かみぎ} 九城^{くしろ}

基本的な設定は八神と同じ。

年齢は兄より一つ下といったところ。

性格は表面上は良いが、本質はやはり兄ほどではないにしても破綻

しており家族以外はどうなるうが知った事じゃないと思っているが、命については平等に見ている。（裏を返せば虫を殺すように人も殺せると撃いことだが）また極度のブラコンでもある。

魔術は兄同様、ルーンの炎を多用していたが自分に合わないとうことで、神に頼み（脅し）ぬらりひよんの孫に出てくる花開院 竜二の使う式神に変更した。

銃

ヘッケラエック本ムビ
H&KMP7をエクソシストように改造したモノを二丁ずつ持っている、またルーンを刻んだ玉も持っておりそれも撃つ。

使い魔

狸妖怪全般を扱う事が出来、神木家では兄同様、稀代の天才といわれているが本人はたいして何も思っていない。

げんげん
言言 / 餓狼

水でできた式神（使い魔）。相手の体の中に入り込み相手の体液を操る。

とてつし
仰言

水でできた式神（使い魔）。水より純度が高く、あらゆるものを溶かす金生水でできている。

登場人物紹介（後書き）

今後も追加していきます。

11 / 5 改編

被魔塾（前書き）

登場人物紹介はどうでしたか？

では本文です。

被魔塾

八神SIDE

俺は今、正十字学園の入学式を受けている。

それにしても偉い奴はどうしてああも長ったらしい話が好きなんだろうか、長いだけでたいした中身がない、非効率の極みだな。

数時間後

今俺は被魔塾の教室で自己紹介をするらしい、どうも塾の方は今日から授業があるらしいそれでだろう（妹はなんやかんだあって塾と一緒に受けることになった）しかしあの奥村燐だったか？何であるに騒いでたんだ？

まあ、いいか。

どうせそんな設定何だろうしな。

お、次は俺の番かじゃあいつてやるか。

「初めまして、神木八神です。手騎士^{テイマー}、詠唱騎士^{アリア}、騎士志望^{ナイト}です。この剣は父親の形見で魔剣です、銘を『贄殿遮那^{「えとのしやな」}』といいます、また魔法円はすでに持っています。ちなみに九城は妹で出雲はいとこです。」

なんか、出雲が睨んできたような気がするな、まあ、あいつとは折り合いが悪いしな。

次は九城か、「転生者でーッす」とか言わないよな？

「初めまして、歳は皆さんより一つ下ですがよろしくお願ひします。お兄ちゃんテイマーの言った事は本当だからね。なりたいのは手騎士テイマー、詠唱リア騎士ドラクーン、竜騎士ドラクーンです。お兄ちゃん同様魔法円はすでに持っています。」

はあ、良かった。ここまで来てこの設定を壊したくはないしな。

てかもう授業があるのか？えーと一番最初はの授業は・・・魔障か・
・もうあるしいいか、その次の授業は、お！魔法円か、使い魔が
だせるな、なにだそうかな？白面金剛九尾はどうかな？『魔女狩り
の王ウス』はどうか？両方強すぎるからやっぱここは、白孤はくこが妥当か
な？あと炎剣と、まあこれでいいか。

二限目

「稲荷神に恐み恐み白す 為す所の願ひとして成就せずということ
なし（ぼんっ）」

白孤が二体でたな、しかしあれだけでなんで威張れるんだ？

「そなたは何を望む！そなたは何を欲する！厚かましき者よ（ぼん
っ）」

化け狸が五体出てきたな、欠伸をしてるよあいつ

「ほう、化け狸が五体か・・・凄まじい才能だな・・・」

ネイガウス先生が褒めてるけどあれは九城の本気じゃないぞ

「ん？たったこれだけが？望むなら陰神刑部狸でも出そうか？ネイ
ガウス先生」

「な！？そんな大妖怪まで出せるのか！？」

まあ、本当に出せるだけなんだがな

「うん、そうだけど。ちなみにお兄ちゃんは白面金剛九尾も出せるよ」

「そうか・・・いや出さなくていい、ここで出されると生徒達が才能という壁に当たってしまう可能性があるからな・・・」
「そりゃそうだ、別にどうでもいいけどな」

「じゃあ次俺ね」

「炎よ (Kenaz)」
みんながこつちを振り向いてるな、さっきの九城の説明でこつちを見てるんだろつがな・・・、じゃあ見せてやるよ、神からの贈り物をな。

SIDE OUT

「炎よ (kenaz)」

その言葉と同時に八神は大量のカードをまいた。カードはラミネート加工したルーンカード、その枚数は数千枚、数としてはたいしたことはないがここで見せるには十分すぎる威力を込められる枚数であった。

「巨人に苦痛の贈り物を (PurisazNupizG edo)」

その言葉と同時に炎剣が湧きでた。

「この剣は摂氏2500度、人肉は摂氏2000度で『焼かれる』前に『溶ける』し、悪魔にも十分すぎるほどに威力があるな。どうも下級使い魔を大量に出して圧縮したものらしいな」

淡々と炎剣の説明をする八神に対して塾生たちは数人を除いて呆然とした、そして例外の一人がこう言った。

「すげー！どうやるんだそれ!？」

屈託のない言葉どりの羨む顔で燐が八神にこう言ったそして八神が

「こいつはどうも特殊な才能らしくな、親戚は妹を除いて誰も出来なかったぞ」

といい、なんやかんやでこの二人は友人になった。

夜

「どうでしたか？」

夜、ある学生寮で雪男が何者かに電話をかけていた。

「まあカタかったですですが初授業にしては上出来でしたよ」

ある人物とは、メフィスト・フェレスこの学園の理事長にして正十字騎士団の名誉騎士であった

「・・・いえ僕じゃなくて」

自分に対する評価をあまり気にせず別の事をきりだした。

「ふむ」

「あの炎は悪魔ちからに有効でした、使えます。不安定でまだ感情に振り回されているようですがセンスはいいようだ」

今相談しているのは奥村燐の力の事であった。

「自在に使えるようになれば我々正十字騎士団にとって最高にユニークで最強の兵器になるでしょう」

「じゃあ・・・」

「ただし監視は必要です使い物になる前に騎士團上層にバレたくないですからね」

「まあ、時間の問題でしょうが・・・」

「・・・わかっていません。それと・・・」

燐に対する事は終わりそして・・・

「ええ、あの八神君の技術ですね。私も初めてみました、下級悪魔とはいえあれだけの数を出すと・・・しかも圧縮するとなると・・・彼らもまた監視が必要です」

「彼ら？彼じゃなくてですか？」

解っているながら。そんな口調で問いかける雪男の対し

「九城さんもです」

半ばめんどくさそうに答えるメフィスト

「・・・解りました。そうします」

「結構、結構ではまだどこかで」

こうして、危険因子および謎の因子の相談が終わっていった

被魔塾（後書き）

うわー、構成がめちゃくちゃだ　！！！！
読んでくれてありがとうございます。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

記憶（前書き）

今回は主人公の転生前の話をしします。

では本文です。

記憶

八神SIDE

塾が終わった、そのあと隣にルーンの事を教えた。（隣はすぐに頭を抱えて雪男先生に連れて行かれた）

九城は鍵で家に帰った。俺は寮に帰って寝ることにした。

夢を見た、転生する前の、唯一はっきりと覚えているあの事を

俺と九城で（転生前の名前は神によって消された）家に帰っていた。いつもどおり、本当にいつもどおりだった。

当時俺は中三、九城は中二だった、性格は破綻はしていなかった。それどころか優等生だったと思う、勉強の才能はその当時のままなはずだし、たしかどこかの委員会の委員長をやってたはずだ。

家に帰って扉をあけると父親と母親が死んでいた、いや、殺されていた。

強盗が一人包丁を持って立っていた。

その時俺は尊敬していたはずの両親を尊敬できなくなった。

二人でかかれればやり返せたはずだ、そう思った。

強盗がこちらに襲いかかってきた、俺は確か授業で使った彫刻刀で応戦したはずだ、九城は台所について包丁を持ってきた。

それから俺達は、血を流しながら、返り血を浴びながら、強盗に勝った。

そのあと九城が警察にこう通報した。

九「両親が強盗に殺されていました。その強盗は私達がどうにかしました」

声色一つ変えずにこう言った。

警察が来た、婦警さんが「怖かったね、怖かったね」と言ってくれた。

実際俺は何も感じていなかった。

通夜が終わり、葬式も終わった後、学校が授業料を免除すると俺達二人にいった。私立で中高一貫校だったからありがたいと思った。

それから数日全ての人たちが俺達二人を慰めた。

だが俺達はその人たちを軽蔑するようになっていた。

その人たちは大事なことを忘れている。

俺達も強盗同様、人を殺しているという事に

あの時俺達は強盗を殺した、目は虚ろだったから薬物中毒者かもと思った。

俺達二人で殺せた強盗に殺された両親、世間体のために俺達二人を見捨てた両親、俺は両親にそう言うレッテルを貼った。

それからも表面上はいつもどおりを演じた。

九城は俺にのみ懐くようになった、他の人にはただの両親が死んだ後の普通の兄妹の光景だと思っていたようだがそれは違う、

親が殺された後は普通は学校なんか来ない。普通はそうにきまってる、それを忘れていた人たちをますます軽蔑するようになった。

神のミスで死ぬ頃にはたしかもう全てを設定としか見ていないような気がする。だが周りの人にはばれなかった、九城にはばれてたよ。うだがその関係だけは設定とは思えなかった、そう、それだけだった、それだけが設定では無く当時のまま、いやそれ以上に好きだった、九城が・・・

そんな夢を見た。そんな別にたいした事のない。そして、とてもとても大切な記憶の夢を・・・

記憶（後書き）

どうでしたか？これが主人公が破綻した原因です。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

崇り寺の子その一（前書き）

原作介入します。はい

ちなみに主人公は原作の知識は消されております。

では本文です。

崇り寺の子その一

八神SIDE

「起きなさい、奥村君。奥村君」

「スキヤキ!？」

何言っただこいつは？授業中（一限目）に寝てることにも驚いた
が起きた時にいったことについても驚いたぞ

「……………起きなさい。八神君も起こしてあげてくれませんか
？」

少し困り顔で言われても……

「えーと、起こしても無駄だと思います。前起こしてみたら5分も
たたずに寝ました」

「何だと!？あつ、ス、スミマセン」

俺には何かはないのか？

「なんやアイツ……なにしに来てん
ん？誰だろう？」

「^い帰ねや」

勝呂君か。まあ、燐に対しては仕方ないかな？

しかし気合入ってるな。あの髪。校則違反じゃないのか？

「つて、おい!？燐!？なにやりきった顔で寝てんだ!？」

「奥村くん!しっかり!」

「……………チツ!」

なにいらいらしてんだあいつは？

対悪魔薬学

「それではこの間の小テストを返します。志摩くん」
「ほおい」

「私 自身あるよ！得意分野だもん」
こいつは確かこの前この塾に入った、杜山しえみだったか？隣の知り合いみたいだが？

「そうなの？別にいいけど」
九城は他人にほとんど興味が無いからな

「そついや、お前なんで着物？」
学校でも見たことないし……

「杜山さん」
「は、はいっ」
こいつ赤面症か？あ、なんかしょんぼりして帰ってきたな

「41点？てか、サンチヨさんって何だ？」
「ウネウネくん？何それ？」
「ぶっはは！？得意分野なのにな！」
お前はどうなんだ？隣

「奥村くん」
頭かいて帰ってきたな。

「二点？凄いな君。いや今度遊ぼうよ」

「他人のふりすんな！！そういう手前はどつなんだ！」
こんな点数の奴とは他人でいたいわ

「ん？87点だが？」

「私は83点」

「畜生！」

何か悪いか？つーか年下に負けるって・・・

「勝呂くん」

「はい！」

おー、燐を睨んどる、睨んどる

「2点とか狙ってもようどれんわ 女とチャラチャラしてるからや

ムナクソ悪い・・・！」

ごもつとも、ごもつとも

「は！？」

は！？はお前だ、燐。

「よく頑張りましたね、勝呂くん」

ドヤ顔で帰ってきたな・・・ウザイが今の燐の顔の方が鬱陶しい

「98点、すげーじゃん」

「ホントだよ」

ウザイがすごいな

「お前らも凄いやないか」

テレ顔で言っているけど

「10点以上差つけられて言われてもなー」

「それもそやな」

「ここは否定するところじゃないのかな？勝呂くん？」

「ばばばかな、お前みたいな見ための奴が98点とれるはずが・・・常識的に考えてありえなーよ」

人は見た目によらない。今の世の中じゃ普通だぜ？言葉にやださんが

「なんやと 俺はなエクスリスト被魔師の資格得るために本気で塾に勉強しに来たんやー！塾におんのはみんな真面目にエクスリスト被魔師目指してはる人だけやお前みたいな意識低い奴目障りだからはよ出ていけー！」

まともだなー、少なくとも燐より

「な、何の権限で言ってるんだこのトサカ俺だつて一様目指してんだよー！」

真面目に授業受けてる権限じゃね？しかも一応って・・・

「お前が授業まともに受けとるとこ見たことないし！」

「ぼ、坊ほん 落ちついて」

「授業中ですよ、坊ほん・・・」

えっと確かこいつらは・・・子猫丸と志摩だったか？そういや、いっつも一緒に行動してるなこいつら

「いっつも寝とるやんかー！」

「お、俺は実践派なんだ！体動かさないと覚えんの苦手なんだよ！」

「うんうん、正論だ・・・どんどん言っちゃって下さいね」

「ああ、まったくもって正論だ。もって言ってやれ」

ニコニコ笑顔で言う俺達

「だあッ ーお前らどつちの味方だー！」

「さてどっちでしょうか・・・おっと・・・」
あっち(笑)

体育・実技

「うおおおおお!!!!」
何やってんだあいつら?

「何あれ」

「さあ」

少し困り顔で出雲の問いに朴が答えたな

「はは・・・坊も^{ほん}けつこう速いのにやるなあ。あの子」
そうなのか?おっと

「しかし八神君・・・あれ反則じゃないですか?」

「あれがお兄ちゃんだから気にしない気にしない」

「でもさすがにスケボーは・・・」

駄目なんて言われてないもん。ってあいつらホントに早いな

「実践だったら勝ったもん勝ちやああ!!!!」

!? 燐を蹴りとばしたっ!??

「うわ!? 危ないわ! こっちに当たったらどうすんだ!??」

「スケボー乗っ取る方が悪いわ!」

なにが悪いんだよ!??

「なにやってんだキミたちはア、死ぬ気かネ!」

「違いまーす!」

転生したのに死にたかないよ!?

「この訓練は徒競走じゃない悪魔の動きに体を慣らす訓練だと言っただでシヨウ!」

まったくそのとうりだ。

はあ疲れた、つか喧嘩してるよあの二人。

「勝呂くん こっちに来てくれタマエ」

「?はあ」

なんであいつだけなんだ? 燐もだろ?

「なんでアイツだけ?」

「さあ・・・」

「つーか何なんだアイツ・・・」

お前もだろ、燐

「かんにんなあ、坊ほんはああ見えてクソ真面目すぎて融通きかんとこあつてなあ、ごつつい野望持って入学しはったから・・・」

「野望?」

「坊ほんはね、『サタン倒したい』いうて被エクソシスト魔師目指してはるんよ」
あー、そりゃあ無理だな・・・

「あつはははは・・・! 笑うやる?」

「笑うは行き過ぎだけど、不可能な夢だな・・・理由もおそらく『青い夜』だろうし・・・」

「不可能? なんでだよ? それに青い夜って何だよ?」

・・・こいつ何にも知らないんだな

「はあ、だって不可能だろ? サタンはこの物質界アッシャーに同等の物質がな

いだろ？それどころかほとんどは10秒持てばまだいい方だ・・・
まあ悪魔と人間のこのような奴は虚無界ゲヘナに行けるが別かもしれんが・
・『青い夜』は力のある被魔師エクスジストたちをサタンが自分の炎ちからで大量虐
殺したことだ。解ったか？」

「お、おう・・・」

本当か？お、勝呂が帰ってきた

崇り寺の子その一（後書き）

長くなるので二回か三回に分けたいと思います。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

崇り寺の子その二（前書き）

どうしよう、とあるが本格的に入ってきそつとは言っても何十話も後のことですけどね

では本文です

崇り寺の子その二

勝呂SIDE

「いいかい、勝呂くん！」

「なんでや！なんで俺だけなんや！？」

「きみは成績優秀だし。基本教科の先生方は皆期待なさってるんだ

」

「はあ」

「あんまり問題は起こさない方が賢明だネ」

「……あのぉ……」

「なんでぼくだけ注意なんですか？あいつら……奥村 燐と神木

八神やって……」

「ん？八神君に至っては何にも注意することは、ないんだがネ」

「な、なんでや！？きよとんとした顔で言いおつとるし」

「スケボーに乗ってたやないですか！？」

「ん？誰が持ち込み禁止と聞いたんだネ？むしろ実践では車などで逃げる事が多い。そういう点では彼は最優秀だネ」

「た、たしかに……納得できたような……できんかったような……」

「じゃ、じゃあ、奥村は……奥村 燐は……」

「ああ……彼は」

「あいつは何も悪くないとは言わせんぞ！」

「一理事長（フェレス卿）が特別に入学させたワケあり生徒らし

「い 君もあまり関わらん方が利口だよ」
「特別やと・・・？」

SIDE OUT

八神SIDE

何故こうなった？

勝呂が帰ってきて・・・そうそれまでは良かった・・・
先生が何かわけわからない・・・とゆうか完全にプライベート丸出しで授業を中止して、それから勝呂が隣に喧嘩売って、隣があっけなく断ってそれにキレた勝呂が今あそこにいると・・・

「お兄ちゃん！？目がうつろになってたよ！？おい！戻ってこい
い！！！」

「五月蠅い、いや止めなくて大丈夫かねあれ？」

「私は家族以外がどうなるうが知ったこっちゃない・・・あつ！そ
うだそうだ、大事なことを忘れてた」

「なんだ？とても悪い予感が・・・とゆうか巻き添えが増えたと喜ぶ
ような顔はもしかして・・・」

「お母さんここに引越すって」

「はあつ！！！？」

「どうしたのあんたが叫ぶなんて？」

「叫ばずにいられるか・・・一大事だ・・・こいつもうすうす解って
入るだろうが・・・」

「お母さんがここに引越すって言うてるの。勤務先は日本支部本
部らしいよ」

「・・・あんたらも大変ね・・・あんな子離れできない母親を持つと」
いや出雲にも結構、だきついていたぞ？こいつも顔色悪くなってきているし・・・

「ど、どうしたの？出雲ちゃん、八神君、九城ちゃん？」

戸惑って聞いてくるな朴俺らは今睡眠の危機に陥っているんだ・・・

「後で説明する・・・（ガクガク）」

「お願い、聞かないで朴・・・（ガクガク）」

「大げさだなー、二人とも」

「解った、今は聞かないでおいとくよ・・・」（九城ちゃんは喜んでるけど、二人はおびえてる？じゃあおばさん関係かな？じゃあ聞かない方がいいね・・・）

「・・・俺は」「俺は！」

お、始まったか。そうだな今を生きよう！未来じゃなくて今を大切にしよう！

「サタンを倒す」

覚悟を決めたような顔で言っているが難しい夢だな、悪魔の子でもなければ・・・そういえば、噂で悪魔の子が多く所属する部隊がロシアにあると聞いたことが・・・

「ブツ プハハハハハハ、ちょ・・・サタンを倒すとか！あははは！子供じゃあるまいし」

現実逃避のように笑う出雲だが声だけ聞けば侮辱するように聞こえるなこれは・・・

「おい！出雲！？今ので心が揺さぶられたらどうするんだ！？」

「あつ」

今気がついたかのように言っな ！？

「ゲボオオオオオ」ボムッ

！？燐？何であそこに燐が居るんだ？いやなんで食われているんだ！？

「おい！」

「きゃああ」

「燐！」

きゃああじゃねえぞ出雲！？お前があれの引き金じゃあねえか！？

あ？どうなってんだ？^{リバー}蝦蟇が離れていつてる？

「・・・なにやってんだ・・・バカかてめーは！！！」

「いいか？よく聞け！」

なにがどうなってんだ？ああ、バカ神めなになが『原作知識消しとくねー』だ！？その代わりにとあるの知識をくれたけどよ！今の状況が解らん！

「サタンを倒すのはこの俺だ！！！！てめーはすっこんでろ！！」
は！？

え、ちょ、えー！？あいつ俺の話聞いてたのか？悪魔の子でもなければ不可能だと言ったのに・・・
あいつのばかさは鳥レベルか？はあ、あいつらあつちでギャーギャー騒ぎ始めたし・・・

SIDE OUT

S I D E O F F

「遅くなりました」

夜の鉄塔に二人と一匹の悪魔がいた

「久しぶりだなアマイモン “地の王”よ」

「ハイ・・・お久しぶりです兄上」

地の王 アマイモン、世界各地で悪魔もしくは神として恐れられ、
崇められる悪魔。余談だが相対する天使は神の火ウリエルである。

「して、父上のお答えは？」

「・・・父上は兄上の申し出を受けると」

能面のような無表情で言うアマイモン

「・・・ほお・・・それは大変結構」

その応答に何かを企んでるかのように笑うメフィスト

「では父上には「我らの小さな末の弟は私の羽の下ですくすく育っている万事うまくいっている」とお伝えしてくれ」

「解りました・・・兄上は実家には戻らないのですか？」

「行け。父上をお待たせするな」

「・・・ハイ」

追いたてるようにアマイモンを返したメフィストは

「・・・フッフ戻らないとも、私のような放蕩者にとってはこんな
愉快的玩具箱はないからな。楽しいお遊戯はこれからだ」

夜景を一望しながらこう言い放ったのだった。

S I D E O U T

八神SIDE

気持ち悪い

燐が真面目に勉強しようとしたり、勝呂が燐に親切だったり・・・

「先生、今日もう帰っていいですか？」

「気持ちは解りますが駄目です」

苦笑いで奥村先生が言うが、

「こんな気持ち悪い空間にもっといると!？」

「すみません、そうです」

酷い・・・

うっ、寒気が

SIDEOUT

崇り寺の子その二（後書き）

書き終わりました。

本文で書いたロシアの悪魔の子が多く所属する部隊は『殲滅白書』の事です。後で出てくるかもしれません。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

友千鳥その一（前書き）

八神と九城の母親の事がちよこつと出てきます。

子離れできないをなんて言うんでしょっ？

これから漫画での一話を二、三話にして書いていきたいと思ひます

では本文です。

友千鳥その一

SIDE OFF

「今日こそ・・・絶対・・・お友達をつくる!!」
被魔塾に行く扉の前で何か決心を固めたような顔でプルプルふるえながら言うしえみだが

「今日こそちゃんとあいさつするんだ。頑張るぞ!」
今までちゃんとあいさつしなかったのかとようなこと言う、あいさつしたぐらいで友達できれば世の中は苦労しない

「見ててね、おばあちゃん・・・!!」
そう言いながら扉をくぐっていくしえみ、そして出雲と朴に廊下で会い

「・・・こ、こんにち・・・わッ」
なぜかあいさつするんだけど盛大に転び、びっくりした二人に振りかえられ

「・・・」
「大丈夫!?ご、ごめん・・・。ちょっと出雲ちゃん」
出雲は何も言わずに塾に向かい、朴は心配しなぜか謝り出雲を追いかけ行って行った

「・・・!!」
しえみはそのことと・・・とゆうかあいさつだけで転んだことに顔を真っ赤にしていた

「しえみ。何やってんだそんなところで・・・」
「んなもん、転んで顔真つ赤にして放心してるだけだろ」
その時、間が悪いとゆうか、何とゆうか、燐と八神が入って来て、
燐はしえみのわけのわからない行動？について思ったことをそのま
ま口に出し、そして八神は的確に現状を説明た

「・・・燐」

「俺はいない事になっっているのか？」

しえみは燐の名前だけいい、そのことに首をかしげる八神

「な・・・なんでもない・・・！」

「無視かい」

「ドンマイ」

八神の言葉を聞き忘れたのか、ただテンパってるだけなのか無視し
てなんでもないと言いながら塾に向かうしえみ

被魔塾の教室

「夏休みまで一カ月半切りましたが、夏休み前には今年度の候補生
認定試験があります。エクスイア候補生になるとより高度な訓練が待っている
ため試験はそうたやすくありません。もし合格した場合夏休みは任
務にあたってもらいます」

「なっ!!!?え?さ、里帰りできないんですか!?!」

雪男の最後の言葉に八神と出雲は驚き、顔がひくついていた

「はい。そうですがどうしたんですか？」

「ご愁傷様。いえお母さんがここに引つ越すと言っていてそれを防
ぐための最後の・・・とゆうかそれしなかったら確実に引つ越すん
ですよ。うちの母は」

雪男は里帰りできない事を固定し、九城は満面の笑みでご愁傷様と
いい首をかしげている人たちに説明をした

「・・・もしかしてあなた達のお母さんは神木 砕さんですか？」

「どうして知ってるんですか？うちの母の名前を？」

なぜか雪男は久城達の母親の名を言いあて、それに九城は首をかし
げ八神と出雲は名前を聞きガタガタ震え始めた

「いえ、私達が候補生エクスワイアだった時の教師だったんですよ。銃器の・・・

「へえー、どんな授業だったんですか？」

「脱線してしまいますからそれはおいおい話すとします」

雪男の言葉には九城も驚き授業内容を聞こうとしたが脱線してしま
うため、おいおい話すと言いながら二人がおびえる理由を理解した
ようだ

「まあ、候補生エクスワイアになるための強化合宿を来週一週間行います。強化
合宿に参加するかしないかと・・・所得希望の“称号”マイスターをこの用紙
に記入して月曜までに提出してください・・・」
一通りの説明をして用紙を配る雪男。そしてようやく現実世界に戻
り始めた八神と出雲

「マイスター “称号” って何だ？教えくれ・・・オネガイシマス」

「はあ!?!」

燐の質問に思わず叫んでしまった八神

「どないしたんや、八神」

「ぼ・・・勝呂、燐がバカだ。あほだ」

「おまん今、坊ぼんって言おうとしなかったか？それに奥村がバカなこ

とは今に始まった事じゃないか」
八神の叫んだのを聞いてやってきた勝呂を八神は坊ほんと言おうとしたんじゃないかと聞き、さらに馬鹿なのは今に始まった事じゃないと言おう

「そりゃあ、そうだが、『称号マイスター』ってなんだ』って聞いてきやがった」

「……こいつは本ほん当まに被エクソ魔シス師トを目指しとるんか？」

八神は燐が聞いてきたことを言い、勝呂は本ほん当まに目指しているのかとこめかみに血管を浮かび上げさせながら聞いた

「ははは、奥村くんてほんに何も知らんよなあ」

「な……何なんだよクソ……世の中にはそんな人もいるんだよ……」

志摩は燐が何にも知らないと言っていると、燐は否定もせず固定した

「称号マイスター」いうのは……」

「子猫丸！！教えるな！（おしえんでええし！）」

「こねこまる！？」

八神と勝呂の言葉を無視して説明する子猫丸

「なんとなく解った。ありがとなこねこまる。お前らは何取るの？」

「何シレッと馴染んどるんやオイ！」

子猫丸が説明し終わりみんなは何をとるのかを聞き始め、勝呂はなぜかイライラし始め、それからは全員がなんやかんやで所得志望の称号マイスターを言う事になった

「前は使い魔を出せるものに出してもらった。今回は手本を見せる、そして全員に悪魔を召喚できる才能があるかをテストする」
ネイガウスがそう言いながら魔法円を書いた

「図は踏むな、魔法円が破綻すると効果は無効になる。そして召喚には己の血と適切な呼びかけが必要だ」

そう言いながらネイガウスは包帯が巻かれ血がにじみ出ている腕を出し、呼びかけた

「テュポエウスとエキドナの息子よ」「求めに応じ」「出でよ」
言い終わると魔法円から異臭をまき散らしながら屍番犬ナベリウスが出てきた

「先ほど配ったこの魔法円の略図を施した紙に自分の血を垂らして思いし付く言葉を唱えてみる」

ネイガウスの説明が終わるやいなや出雲は白狐を二体呼び出した

「白狐を二体も・・・見事だ神木出雲」

白狐、狐妖怪の中では善狐ぜんこに分類される。古いものになると人語も理解すると言うがしかし

「千里眼により全てのことを見透かし」「私との契約を思い出し」
「末廣大神としての力を今ここに振るわん」

八神は尾が四本ある善狐、天孤を一体呼びだし、その天孤は八神の足元で伏せた

「て、天孤を呼び出しただど？いや素晴らしいぞ八神」

ネイガウスは動揺しながら称賛をしたが、大半の生徒は何が素晴らしいのかを理解できずに首をかしげていた

「天孤は1000年生きた善孤がなる強力な神使なのよ、一部では神と同一視されてる所があるほどにね」

天孤のことを説明する出雲。たしかに今この世界で天孤を呼びだせ従わせることのできるのは数えるほどしかおらず、八神ほどの年齢となると皆無に等しかった

「実はもう一体呼び出せますけど疲れますからやめていいですか？」

「あ、ああ。良いぞこれはあくまで才能があるかのテストだしな。実際お前たちはする必要がないんだ」

たしかに前の時間で使い魔を呼び出したため呼び出す必要がなかったという

「私の言葉に迷い」 “お前の姿に戸惑い” “その力は防げない”

“出でよ”

その言葉と同時に水の狼が出てきたが八神と出雲は眉をひそめた

「それは・・・水虎の一種か？」

ネイガウスもこの使い魔は初めて見たようで何かは良く解っていないようだ

「ええ、多分。初めてやってみましたし・・・ね？牙狼」

今回初めて出してみたからわからないと言う九城

「化け狸はどうした？」

九城が出せる使い魔の大半が化け狸でそれを出さなかった事を疑問に思ったように聞いてきた

「いや、夢でこの言葉を聞いてさ、試したくなったの」

言外に昨日神が夢に出てきたとゆう九城

「そうか、解った」

そしてその意味を理解した八神は適当に答えた

ちなみにこのやり取りの間にしえみが緑男グリーンマンの幼生をだしたり、他の奴らが紙に穴が開くかとゆうほど魔法円の略図を見ていた

友千鳥その一（後書き）

どうでしたか？

天孤の知識はウィキで調べました。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

友千鳥その二（前書き）

昨日投稿できませんでした、すみません。
友千鳥はこの話で終わると思います。

では、本文です。

友千鳥その二

SIDE OFF

「それは、^{グリーンマン}緑男の幼生だな。素晴らしいぞ杜山しえみ」

「……………」

ネイガウスが^{グリーンマン}緑男を出した、しえみをほめたがとうのしえみは顔を真っ赤にして驚いて声も出せずにいた

「二ー」

「……………こんにちは」

^{グリーンマン}緑男が鳴き声をあげ、そのあとしえみの頬に頬ずりをした

「ねえ、神木さん……ヒツ!？」

最後の方がおかしくなっているのは神木さんが全員、しえみの方を振り向いたからだ。

「どれだ、せめて下の名前で呼んでくれ」

「……………ごめんなさい」

下の名前で呼んでくれという八神に対してしえみは謝った

「え、えつとね。私も使い魔、出せたよ!」

「……………それが?」

神木家の三人組はしえみが使い魔を出せたことを『それが』で済ませた。

まあ、彼らにしてみたら使い魔は出せて当たり前のもので、出せないのは自信がないからといったものであった。

「……………今年は手騎士^{テイマー}候補が豊作のようだな、悪魔を操って戦う手

騎士は^{エクスシスト}被魔師の中でも数が少なく貴重な存在だ」
今年の豊作ぶりにかなり驚いているネイガウス、それからしばらく
使い魔の説明をして授業が終わった

「神木さん！」

「……だから、下の名前で呼べって言ってるだろうが……」
廊下で神木と懲りずに呼ぶしえみ

「おーい！おーい！」

「~~~~~！！何で私につきまとうのよ！使い魔は自信さえあ
れば誰でも出せるものなの……！！」

と、まあいささかずれているが出雲がつきまとう理由を聞いた

「？えつと、あの……あの……」

何かを言おうとするしえみだが意外に短気な出雲と八神はこめかみ
に血管を浮かばせ始めていて、おおらかな九城でさえ、今にもどっ
かに行きそうな顔をしていた

「わ、私と、おとお友達になつてください！」

「……今はそれどころじゃない……！！」

「……いいよ」

即答で出雲と八神は今はそれどころじゃないといい、九城はいいよ
と言った。

あまりの事に朴でさえポカーンとしていた。

「わ、私……友達いたこと無くって……」

しえみが続きを言ったが出雲と八神は次の授業にいそいそと出てい
った

「い、出雲ちゃん！？八神君！？まだしえみちゃんが話しているよ

！」

「話なら断った、時間の無駄だ」

「こつちも同じよ」

朴は二人を止めようとしたが聞く気なんかさらさらないと云う二人に、予想していたのか苦笑いをする朴

「あ、あの、しえみちゃん？私で良かったら友達になるよ？あの二人、今いろいろあるからそのあとにした方が・・・」

「え？あ、ありがとう！」

朴は自分で良ければ友達になると言い、しえみは喜んだ。

ちなみに九城は餓狼で遊んでいた

それからしえみと朴はしえみがいささかきこちないが、いたって普通の交友関係があつた

夜 旧高等部男子寮

「しえみにも友達ができたみたいだな」

「え？」

この寮の住人である奥村兄弟が雑談していた。どうもこの寮にはこの二人しかおらずいろいろ都合がいいらしい

それからしばらくして

「うわなんやコレ 幽霊ホテルみたいや！」

志摩がいきなり失礼なことを言い放つたが、何せ壁にはひびがあり、全体的に黒ずんでいるため仕方ないことだった。

「おはようございます、では中に案内します」

志摩の言葉を予想でもしていたのか中を案内すると言つ雪男

「……はい、終了」

強化合宿の内容の一つであるプリントをしていた訓練生達ベイズ

「プリントを裏にして回してください」

雪男がプリントを回してくださいといい、そして明日の事を説明し始めた

「ちょ……ちょっとボク夜風にあたってくる」

「おう、冷やしてこい……」

燐が知恵熱を出し勝呂の言葉を聞きとれたかさえ分からない様子で外に出ていった

「朴、お風呂入りにいこつ」

「うん、しえみちゃんも入る？」

「うん！私も入る！」

朴の言葉に出雲は少し顔をしかめたが、過去に八神の交友関係に口を出してボコボコにされたことがあった、ため何も言わなかった

ちなみに九城は母親の凄まじい抵抗があったため来た時には八神におぶられてきていて、今も寝ていた

「うはは、女子風呂か、ええな。こら覗いとかな あかんのや
ないんですかね。合宿ってそうゆうお楽しみ付きもんでしょ」

「志摩！！お前、仮にも坊主やる！」

「また、志摩さんの悪いクセや」

「白狐に噛み殺されるからやめとけ」

志摩を止めようとする勝呂と子猫丸だが八神は止めようとする雰囲気ではなく、過去にあった事を言うような雰囲気であった

「また、また可愛いわね妹の裸を見られたくないだけでしょ？」

顔が青くなりながら言う志摩だが八神はため息をつきこう言った

「過去のそういう奴がいてな、母さんにそいつの親が勤めている会社を潰されその後の人生を・・・一家心中だったか？」

とんでもないことを大マジの顔で言った八神にここにいた全員がこう決心した

(これから、この三人にかかわる時はあまり変なことをしないようにしよう)

風呂場

「お風呂場はまだ綺麗で安心したわ、どこもかしこもオバケ屋敷みたいなんだもん」

「うん」

出雲はひとり言を言いながら愚痴り、それに満面の笑みで相槌をするしえみだが一人暗い表情の朴

「あのね、出雲ちゃん、しえみちゃん？」

「なに？朴」

「なに？朴さん」

何かをきりだそうとする朴

「私、塾はやめようと思う」

「え……」

あまりの事に驚く出雲だがしえみは何となくわかっていたのか残念
そうな顔をしていたものうなずいた

それから朴はやめる理由を話したが出雲はそれでも引き留めようと
したが

天井から何かが、黒い何かが落ちてきた。

そして三人は天井を見ると屍系グールの何かがいた

「「「きゃああああ」「」」

廊下

「!?!?今のは……」

「叫び声だな……風呂場から聞こえてきたからおそらく出雲達だ
ろ」

雪男が叫び声を聞こえたのが驚いたが、たまたま同じ場所にいた八
神が落ち着いて現状を説明した

「俺は一応見に行く、先生は銃を持っていますか？」

「はい、私も助けに行きます」

八神が異様に落ち着いているのに少し疑問を雪男が持ったが、今は
それどころではないため走って風呂場に走ることにした

「おい、あれは……隣か？」

「クソ！何で兄さんが……」

風呂場

「“稲荷の神に恐み恐み白”」
朴は屍系グールの魔障をうけ倒れておりそれを今しえみがアロエで応急処置をし、それを邪魔されないために出雲は白狐を出そうとしたが

「おらあ ああ」

燐が屍グール、おそらく屍番犬ナベリウスを殴り、それに驚き白狐が出せなかった

「兄さん！」

そして雪男が入ってきてババババンと屍番犬ナベリウスに銃を撃ち、屍番犬ナベリウスは出ていった

それからはいえみの処置が正しいと雪男がほめ、気がついた朴はいえみに礼を言った。ちなみに燐は八神に引張られて風呂場から出ていった。

友千鳥その二（後書き）

うーん、多分めちゃくちゃ解りにくかったと思います。
そつゆつ点は感想の悪い所に書いてくれると嬉しいです。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

此に病める者ありその一（前書き）

最近投稿できませんでした。すみません
久しぶりに神が出てきます。

では本文です。

此に病める者ありその一

SIDE OFF

神の空間

「アベシ」

いきなり暮バトル漫画のやられたような奇声をあげながら蹴り飛ばされたのは、神であった。

「いきなり何すんだよ！私は見てくれのとうり、か弱い少女だよ！（年齢はウン億歳だけど）」

「黙れ。俺を殺した奴が何を言う」
神を蹴り飛ばしたのは神木 八神。実は転生してからもちよくちよく神と話していたのだが、そのたびにまずは蹴り飛ばすのが八神であった。

「で、今回は何の用だ？九城にはもう行ったんだろ？さつさと話せ」

「あ、うん。実はね。原作ブレイク開始するわ」
衝撃の（笑劇？）発言であった。

「できないつつたのは誰だったか？」
顔を引くつかせながら、問いかける八神。

「あ、うん。それはね」

「それは？」

もったいぶる神にこうして欲しいんだろつなと、めんどくさそうに繰り返す八神

「君たち原作知識消したし、いくらブレイクしようが自覚ないじゃん」

元も子も無い、身も蓋も無い。八神はあきれて声も出なかった。

「あははは！どう？衝撃の事実は。つーか、キミたち転生させるだけで原作ブレイクだったっの」

自分で言ったことに、大爆笑する神だが、八神は肩をプルプルふるわせ

「じゃあ、何だ！あのイギリス清教とか、ロシア成教とか、ローマ正教とかも原作にはないのか！？」

「もちろん」

どうも神は原作どつりにする気なんざ端からなかったらしく。いろいろ要らん設定をブチ込んだとのこと

「ふっざけんなー！！！」

「おっと時間だ。じゃあねー、また今度とか」

ポチッとボタンを押し八神のいた所に穴があき、八神を退場させる神

「この魔法円の抜けている部分を前に出て描いてもらう。・・・神木出雲」

時は変わって被魔塾。今は魔法円・印章術の授業中で、ネイガウスが出雲を指名したが出雲は答えずにいた。

「神木出雲！」

「！！！」

それに気がついたネイガウスがもう一度呼び、それでようやく出雲は気がついたようで、自分でも信じられないという顔をしていた。

聖書：経典暗唱術

「悪魔の大半は、“致死節”という、死の理……。必ず死に至る言や文節を持っているでござマース」

そう言っているのは、本当に被^{エクソシスト}魔師か？というほどに太っている、教師であった。

「では、宿題に出した。“詩編の第30篇”を暗唱してもらおうでござマース。では出雲さん。お願いするでござマース」

「はい！」

そう勢いよく答えた出雲であったが完璧に暗唱することができず、周りも珍しいというような顔で見っていた。

そして次にあてられた勝呂は完璧に暗唱し、まわりは惜しみない拍手をした。

此に病める者ありその一（後書き）

授業らへんには八神や九城が全く出てきませんでした。
次の話には必ず出します。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

此に病める者ありその二（前書き）

よし！嫌いな戦闘シーンは次話に持ち越した！
皆さんすみません適当で・・・

ですが必ず次話で戦闘シーンは書きます！

では本文です。

此に病める者ありその二

SIDE OFF

被魔塾

「いや。でもあれだけの文節を苦も無く暗唱するなんて、お前凄いな」

聖書・教典暗唱術の授業が終わり、燐・しえみ・八神・九城の四人は京都三人組の周りにいた。

「お前本当に頭良かったんだな」

燐が勝呂を珍しく称賛したが八神は即答で

「お前より頭が悪い奴は、小学校行っても珍しい」

「そやな」

燐の馬鹿さを小学校に合わせても珍しいと言い、それに勝呂も賛同した。

「な、なにー！そりゃあ、小学校の時も結構サボってたけど（ゴニヨゴニヨ）」

燐は中学だけではなく小学校までサボっていたらしい。

「すごいねえ、勝呂くん！びっくりしちゃった」

しえみが改めて勝呂をほめたが

「いやいや、惚れたらあかんえ？ええけど」

おそらく冗談であろうが、お角違いなことを言った。

ちなみに勝呂が言った、詩編の第三十篇はこうであった。

“ 神よ、我汝をあがめん。

汝我をおこして、我が仇の我ことによりて、喜ぶをゆるし給わざれなり。

我が神よ、我汝によばわれれば我汝をいやし給えり。

神よ我汝が魂を陰府より救い、我をながらしめて、墓に下らせ給わざりき。

神の聖徒よ、神をほめうたえ、清き名に感謝せよ。

その怒はただしばしにて、その恵は命とともに流し。

我ひたすら神に願えり。

我、墓に下らば、我が血なにの益あらん。

塵は、黙すことなからんためなり。

我神よ、我、永遠に汝に感謝せん。”

と言うような長つたらしい文節を読んだが、これを現代語訳にするところだ。

主よ、わたしはあなたをあがめます。

あなたはわたしを引き上げ、

敵がわたしの事によつて喜ぶのを、

ゆるされなかつたからです。

わが神、主よ、

わたしがあなたにむかつて助けを叫び求めると、

あなたはわたしをいやしてくださいました。

主よ、あなたはわたしの魂を陰府からひきあげ、

墓に下る者のうちから、

わたしを生き返らせてくださいました。

主の聖徒よ、主をほめうたい、
その聖なるみ名に感謝せよ。

その怒りはただつかのまで、

その恵みはいのちのかぎり長いからである。

夜はよもすがら泣きかなしんでも、朝と共に喜びが来る。

わたしは安らかな時に言った、

「わたしは決して動かされることはない」と。

主よ、あなたは恵みをもって、

わたしをゆるがない山のように堅くされました。

あなたがみ顔をかくされたので、

わたしはおじ惑いました。

主よ、わたしはあなたに呼ばわれました。

ひたすら主に請い願いました、

「わたしが墓に下るならば、

わたしの死になんの益があるでしょうか。

ちりはあなたをほめたたえるでしょうか。

あなたのまことをのべ伝えるでしょうか。

主よ、聞いてください、わたしをあわれんでください。

主よ、わたしの助けとなってください」と。

あなたはわたしのために、嘆きを踊りにかえ、

荒布を解き、喜びをわたしの帯とされました。

これはわたしの魂があなたをほめたたえて、

口をつぐむことのないためです。

わが神、主よ、

わたしはとこしえにあなたに感謝します。

これとさつき勝呂が言ったのでは、どっちが効果があると問われれば、それは同じである。

形は違えど意味は同じ。悪魔にとっては、形より中身の方が、効果的であり苦痛であるためである。

「暗記なんて、ただの付け焼刃じゃない！」

出雲が侮辱したように・・・否、自虐的にと言った方がいいだろう。少なくとも八神と九城にはそう聞こえた。

「あ？・・・なんか言ったか。コラ」

「坊・・・」

先ほどまで褒められていたから・・・では無く、先ほどの言葉は、詠唱騎士にとっては侮辱のような言葉であったため、勝呂は出雲に突っかった。

「暗記なんて・・・、本当の学力と関係ないって言ったのよ・・・！」

「はあ？四行も覚えられん奴に言われたことやないわ」

今にも喧嘩になりそうな不穏な空気。そんな中、子猫丸は仲裁に入っただが意味も無く

「あたしは覚えられないじゃない！覚えないのよ！！詠唱騎士なんて・・・詠唱中は無防備だから班に、お守りしてもらわなきゃならない。ただのお荷物じゃない！」

出雲の言ったことに、八神と九城は、やれやれとしていた。

「なんやとお・・・!? 詠唱騎士目指しとる人に向かってなんや!」
「坊!」

勝呂は立ち上がり、ドスドスと出雲の方に向かって行った。

「なによ! 暴力で解決? コツワ〜イ。さすがゴリラ顔ね! 殴りたきや、ホラ。殴りなさいよ!」

それに拍車をかけるように、挑発する出雲。

「~~~~!!・・・代替俺はお前が気に入くわへんねや! 人の夢を笑うな!!」

ドンツ! と燐の座っている机を叩きながら言う勝呂。

「ああ・・・あの「サタンを倒す」ってやつ?・・・はッ。あんな冗談笑う以外に、どうしろってのよ!」

たしかにサタンを倒すという夢は、常人(被魔師がこれに入るかは不明だが)には不可能極まりない夢であった。

70

「じゃあ、何や。お前は・・・何が目的で被魔師エクスシストなりたいんや・・・あ? 言うてみ!!」

「目的・・・?」

出雲の脳裏に・・・そして、八神と九城の脳裏に広がった光景は、地獄。この世にそんなものがあるなら、そう言うのが一番と言うべき光景であった。

「・・・あたしは、他人に目的を話した事はないの! あんたみたいな、目立ちたがりや、ちがってね・・・!」

「この・・・」

出雲の言葉に、とうとう勝呂がキレ、胸倉をつかんだが、出雲が思わずと言った感じで手が出て、それが止めようとたった燐に当たり、さらに授業をしに来た雪男に見つかった。

此に病める者ありその二（後書き）

詩編の第三十篇はネットで調べました。

くどいようですが次話で必ず戦闘シーンは書きます。

ではまた明後日。

此に病める者ありその三（前書き）

此に病める者ありは、今話で完結です。

次話からはオリジナル要素が強くなります。

では本文です。

此に病める者ありその三

SIDE OFF

正十字学園 高等部旧男子寮

「皆さん。少しは反省しましたか」

雪男が塾に居合わせた者達に聞いたのだした。

しかし、塾生たちの膝の上には礮石バリキョウが乗っており、うめき声をあげていた。

「な・・・なんで俺らまで」

燐が雪男に聞いたが

「連帯責任つてやつです」

二、三言で一掃された

「この合宿の目的は、“学力強化”ともう一つ、“塾生同士の交友を深める”っていうのもあるんですよ」

「こんな奴らと、馴れ合いなんてゴメンよ・・・!!」

「コイツ・・・!!」

雪男の説明を無視して、また燐を間に言い争いをしようとする出雲と勝呂。

「馴れ合ってもらわなければ困る。被魔師エクソシストは、一人では戦えない!

そう、被魔師エクソシストは、集団戦法が定石。例外はあるものの、それでも例外は例外。この場のほぼすべての存在にとっては集団戦法は必須であつた。

「お互いの特性を活かし、欠点を補い。二人以上の班パーティで闘うのが基

本です。実践中になれば。戦闘中の仲間割れは、こんな罰とは比べ物にならない連帯責任を負わされることになる。そこをよく考えてください」

雪男が改め説明すると、さすがに出雲は口をつぐんだ。

「……では僕は、今から三時間ほど小さな任務で外します」

「!?!」

雪男が席を外すと言うと、何を期待しているのか燐が反応した。

「……ですが昨日の屍ケイルの件もあるので、念のためこの寮全ての外につながる出入り口に、施錠し。強力な魔除けを施しておきます」

「施錠して……、俺らどうやって出るんすか」

雪男の言葉に勝呂が問いただした。

「出る必要はない。僕が戻るまで三時間、皆で仲良く頭を冷やしてください」

鬼だ。この場にいた全員がそう思うような言葉であった。

ちなみに礮石バリヲシは、持っていればいるほどだんだん重くなる性質がある。つまり三時間も持っていればどうなるかは、予想がつくであろう

「つーか、誰かさんのせいでエラいめえや」

「は？あんだだつて、あたしの胸ぐらつかんだでしょ!?!信じらない!」

また、出雲と勝呂が、燐を挟み口喧嘩を始めようとした時

「一灰は灰に (AshToDust) 一塵は塵に (DustToDust) 一吸血殺しの紅十字 (Squeamish Bloody Road)」

八神がルーンカードを撒き散らし、詠唱をし炎剣を呼び出して、八神、子猫丸、志摩、燐、しえみ、九城、宝、山田の上に乗っていた

礮石を焼き払った。

「おお！ありがとうな、八神君」

「おおきに、八神君」

「すっげー！お前そんなことも出来たのか！」

「すごいねー。ねー、ニーちゃん」

「ニー！」

と解放された者たちは口々に、八神に礼を言ったが

「ちょ、あんた！なんでそいつらだけなの！？」

「そやで！俺はどなするねん！？」

解放されなかった、二人は文句を言ったが

「少しは頭冷やしてろ」

八神はそれを一掃した上に

「そやね。坊は少し頭冷やしていたほうがいいさかいね」

「ん。出雲ちゃんは少し頭冷やしてな」

子猫丸、九城に頭冷やしてると言われ、とうとう黙る二人だが

フツと電気が消えた。

「！？」

皆が驚きあわてふためく中で、志摩が携帯を開き明かりを確保した。それにならない皆が携帯を開いていった。

「あ…あの先生。電気まで消していきはったんか！？」

「まさかそんな・・・」

先ほどの事もあり、半ばありそうな事を言う勝呂

「停電・・・!?」

そう考えるのが妥当だ。何せ電気が付いているのはこの部屋だけ、これでブレイカが落ちるわけも無かった。

「いや窓の外は明かりがついている」

「どうということ?」

たしかに窓の外の建物は明かりがあった。

「停電は、この建物だけってことか・・・?」

燐が言った事は、日本では至極珍しい事ではあったが、そう考えるのも無理は無かった。

「廊下出てみよ」

「志摩さん。氣イつけてナ」

志摩が廊下に出てみようとし、氣をつけてという子猫丸

「フッフ。俺こういうハプニング、ワクワクする性質たちなんよ。リアル肝試し・・・」

志摩が扉をあけると、そこには継接ぎだらけの顔らしきものがあった。

「・・・なんやろ。目エ悪なつたかな・・・」

ボタンと戸を閉めぼつりと言う志摩に、勝呂が

「現実や現実!!!!!!」

認めたくない事を言っていた。

そして扉をブチ破り中に入ってきた、悪魔。

「グルグルルルルル」オオオオ

そしてうめき声を上げながら訓練生ペイジを見た。

「昨日の屍グール……!!」

「……!!」
出雲が昨日の屍グールだと言うと、なぜか燐が反応した。

「ヒイイ。魔除けはったんやなかったん!? てか……足しびれて動けな……」

勝呂は普通に絶叫していた。

しかし、屍グールは、そんな事などお構いなしに、二つある顔(?)のうちの一つが膨れ上がり、破裂した。

「っ!?!」

そんな中、しえみは

「ニーちゃん……! ウナウナくんを出せる」

また謎のフレーズを言い、緑男グリーンマンの幼生は何かの木を出し、即席のバリケードを築いた。

「……あれ? ……くらくらする……」

「しえみ!?!」

「ゲホ」

「あ、熱い」

皆がなぜか、風邪のような症状を訴え始めた。

「屍グールの魔症のせいだ。お前大丈夫なのか? 驚いたな……馬鹿には魔症さえ聞かないとは……」

八神が燐に説明し、疑問を口にした後、勝手に理解したようにうなずいた。

「杜山さんのおかげで助かったが……使い魔は基本的に精神や体

力を削るんだ・・・こいつの体力がつきたらもうお終いだ」
八神が不自然なほどに冷静に現状を説明した。

「え？八神君。君がさっき、つこうた炎剣で倒せへんの？」
たしかに、魔の五大元素によると、腐の王の眷属は火に弱い事にな
っているが

「無理だ。今のカード枚数では中級悪魔を二体も倒せる火力は無い。
そもそもそんなことをしたら、このバリケードが燃え上がる・・・。
いや・・・時間稼ぎ程度ならできるかもな・・・」

八神がブツブツ独り言を言い出し、その間に燐が

「俺が外に出て囿になる。二匹ともうまく俺について来たら何とか
逃げる。・・・ついて来なかったら、どうにか助け呼べねーか、明
るくできねーかとかやってみるわ」

「はア！？何言うてるん！？・・・バ・・・バカ！？」

燐が無謀なことを言い、勝呂が燐を、止めようとしたが無視をして
バリケードの中（人一人が通るほどの隙間はある）にはいていった。
そして、二匹のうち一匹だけが燐についていった。

「おい、勝呂達とはかく詠唱で倒せ。俺はこのバリケードが消え
た時のために炎のバリケードの準備をする。九城は、化け狸を出し
て足止めをしている。出雲は、もし出せるなら白狐を出せ。解った
な」

八神が考えがまとまったのか各々に指示を出した。

「っ！？」

その指示に絶句する出雲。何せ彼女は今、精神がとても不安定で使
い魔に逆に襲われる危険性があったのだから・・・

「八神君・・・、でもアイツの“致死節”知らんでしょ！？」

「屍系の悪魔は……」
「ヨハネの伝福音書」に致死節が集中しとる
八神の指示に、志摩が異論を唱えたが、それに答えたのは勝呂であ
った。

「俺はもう、丸暗記しとるから……全部詠唱すればどっかに当た
るやろ！」

「全部？二十章以上ありますよ！？」

「……二十一章です……」

子猫丸が言った、二十一章。この多さは前話に出てきた、詩編の第
三十篇を単純計算で二十一回唱えるようなものであった。

「子猫さん！」

「僕は一章から十章まで暗記しています。……手伝わせてくださ
い」

「子猫丸！頼むわ……！！いいよな、八神」

「ああ、むしろ願ったりだ」

子猫丸も言うといい、八神は壁にルーンカードを輪のように貼りな
がら、ありがたいと言った。

「ねえ、風邪の私に働けと……？」

「当たり前だ。三体でいいから出せ」

九城は八神に言われていやいや詠唱した。

「“そなたは何を望む！そなたは何を欲す！厚かましき者よ”」
すると三体の化け狸が出てきた。

「なんですか？あの屍グールは？主よ」

「我らはいつを倒せばいいのですか？主よ」

「ならば我らは期待にお答えしましょう。主よ」

出てきた化け狸は、順番に話してきた。

「ああ、うん。そうだね。あいつを倒すから力を貸せ」
すると、化け狸達は、バリケードに入っていき屍に襲グイルって行った。

「坊。じゃあ、俺は全く覚えとらなのでいざとなったら援護します」
すると志摩は仕込んでいたのか、キリクを取り出した。

「子猫丸は一章めから、俺は十一章めから始める。つられるなよ！」

「はい！」

「いくえ」

そして、二人は詠唱を始め、八神はルーンカードを貼り終えたのか
一時的に休憩しており、九城は呪言じゆごんを言ったりして化け狸達を強化
したりしていた。そして、なにも出来ない、出雲は唇をかみしめて
いた。

「・・・心を騒がすな、神を信じまた、我を信ぜよ」
「彼己より語るにあらず」
「汝、汝ら導きて、真理をことごとく悟らしめん」
「子猫丸はもうすでに詠唱をし終わり、勝呂はもう最後の章に入っていた。」

九城はもうすでに化け狸をしまい、銃に・・・機関銃に切り替えていた。

そして、とうとう、しえみが倒れた。

「杜山さん！」

そしてバリケードが消えたが、すぐに八神がこう言った。

「 邪悪を罰する裁きの光なり、

冷たき闇を滅する凍える不幸なり。

その名は炎、

その力を使いて我らを守り、我らの力になれ”」

すると、先ほど貼ったルーンカードから火柱が上がり、炎の壁ができた。

「うおおお！？何やコレ！？凄いなあ！！！」

「うわ！初めてやったのにうまく行った！？」

志摩が八神をほめたが八神は初めてやったらしく、びっくりしていたが

「でもこの枚数はきつい・・・あと十数秒持つかどうかだ。あと四日で誕生日でこの、贄殿遮那を抜けたのに・・・」

贄殿遮那は、十六歳にならないと抜いてはならないという掟があったのだった。

しかし、八神は今にも倒れそうなほどにふらふらであった。

「クソ！すまん。これ爆破させるわ！“起爆”！！！！！」

八神が起爆と言うと、炎の壁が屍ケルに、爆風が襲った。

「グロ、ロ、ロ、」

しかし、たいしたダメージにはならず
勝呂に一気に襲って行ったが

「のやる才……！」

「死体め！喰らえ！」

志摩のキリクと九城の機関銃によって阻まれた。

「……ちよつと、あんた……ま……まさか死ん……！？」

いずもはしえみに駆けより、物騒なことを言おうとしたが、ちゃんと脈があり安心したようだ。

「う……かみ……き……さ……」

「し……しつかりしなさいよ」

何かを伝えようとするしえみ。
そして、

「……、今日はいつもの神木さんじゃない……だ、ね。大、

丈夫……？」

出雲はその言葉で吹っ切れたようで

「……“ 稻荷神に恐み恐み白す……！” “ 為す所の願いと
して成就せずということなし！”」

すると、白狐が出てき出雲を、チラつとみたが、たいして何も言わ
ずに

「汝よ……何か用か？」

「あいつを倒す！行くわよ！」

白狐は出雲に従い、志摩と九城の猛攻を何とか抜け出した、屍ガイに向
かって行った。

「ふるえゆらゆらとふるえ……”^{たまゆひ}霊の被！！！！”」
すると、二匹の白狐は猛スピードで屍^{ケイル}の周りを駆け廻った。

「神木さん！！！」

「やった……！？」

だが、まだであった。

「……また、これを録しし者……” “この弟子……なり！”
勝呂をつかもうとする屍^{ケイル}だが

「千里眼により全てのことを見透かし” “私との契約を思い出し”
”末廣大神としての力を今ここに振るわん”
八神の出した、天狐によって阻まれた。

「我等は、その証の真なるを……知る”
その言葉と同時に電気がつき、天狐と闘っている屍^{ケイル}が怯んだ。

「我おもうに世界も”」

「ゲモ”オオオオオ”」

勝呂の言葉に悲痛な声を上げる屍^{ケイル}。

「その録すところの書^{ケイル}を載するに” “耐えざらん！！！”」
その言葉と同時に屍^{ケイル}は、一度も勝呂に触れることも出来ずに消え失
せた。

「消えていいぞ。天狐」

「ほう……、天狐ずかいの荒い事だ。」

そう言いながらも消えていった、天狐。

「今回は助かったわ。八神。」

「ん。でも燐はどうしたんだか」
勝呂は八神に礼を言い、八神は辛うじて覚えていた燐の事を皆に聞くと

「あっ！」

皆忘れていたようだったが、廊下からどたとたと音がして来て。
（ほぼ全員が構えた）

「おい！」

燐が帰ってきた。

「・・・ぶ、無事？」

「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」

燐の帰還に、皆が絶句していた。

「おおおおま・・・もう一匹は・・・」

ここにいる全員で（例外が二人）で倒したのを、燐は

「え・・・？ああ、倒した！」

その言葉に貢献者二人は（八神と勝呂）

「お前らも倒したのか？スゲーじゃ、え？フンブ！？」
勝呂はラリアットをし、八神はぶっ飛ばされた燐の上に礮石バリキョウを乗つけた。

「大丈夫？」

それを冷ややかに見る出雲はしえみを起こしていた。

「う・・・、うん」

「・・・、あたし、あんたが大ッ嫌い・・・!!・・・でも今回は助かったわ。それだけ・・・!」

まどろっこしくはあるが、しえみに礼を言う出雲。

「・・・これは」

「雪男」

「先生」

その時、雪男が入ってきて、少し驚いているようであった。

「!ネイガウス先生」

「!!!」

そして、なぜかネイガウスが入ってきて、それに、さらになぜか隣が反応した。

此に病める者ありその三（後書き）

さあ、此に病める者ありは終わりました！
次話からはオリジナル要素が強くなります！

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。
いやほんとにお願いします。

おもひで（前書き）

久しぶりです。

期末考査も終わり何とか投稿できるようになりました。

では本文です。

出雲の説明に八神は興味無いと言わんばかりに適当に相槌を打った。

「・・・ねえ、一つ聞いていい?」

「なんだ? 出雲?」

出雲は八神に何かを聞こうとした。その雰囲気はこの場にいた全員が注目した。

「なんで、あんな適当に屍ケールを撃退したの? あんたの実力なら適当な使い魔で何とかなるでしょ?」

「何をいつとるんや、おまんわ・・・」

出雲の言葉に勝呂は耳を疑った。的当に撃退した、適当な奴で勝てた、この言葉はあの試験の意味を根底から覆すような意味であったからだ。

「はは、やっぱり気づいてたか・・・いや、母さんに本気を出すのは絶対にやめろって言われたんだよ・・・」

「どうして!!?!? 朴だつてあいつに!!?!?!」

八神の何の悪びれの無い言葉に出雲が怒鳴った。

「・・・、どうして・・・か・・・。別にどうでもよかった、人の気配がいつぱいあったしな・・・。Despair611それが俺に、俺が魂に誓った名だ」

「ッ!!?!?・・・もういいわ・・・」

Despair、日本語で『絶望』を意味するラテン語であった。これを語った、と言う事はこれ以上探るな殺すぞ。と言外に八神が警告している証拠だった。

「????。何言つてんだお前ら・・・?」

「バカっ! 今そないな空気ちやうやる!」

燐はわけが解らないという顔をして、八神に聞いたが勝呂はそれを

止めた。

「・・・お兄ちゃん。完璧にレイヴェニアちゃんに関わってるよね・・・」

「ん？当たり前だろう。なんで俺がそれ以外で母さんの言う事を聞かなきゃならんだ？」

九城が謎の人名を言い、出雲以外の者が首をかしげた。

「レイヴェニア＝バードウェイ。言ってみればお兄ちゃんの許婚よ・・・」

頭を抱えながらとんでもないことを言う九城

「・・・はあ！！！？」「」「」

そして、当たり前なのだが周りの者は驚く。

ちなみにこの声で寝ていた、しえみが起きてしまった。

「なにを驚く？これでも二カ月に一度は俺もあっちに行ってるぞ？」
「いや、あのね・・・イギリス人が許婚って時点でかなり常識外れだし、そもそもこの時代に許婚って言うのがね・・・」
訳が解らないという顔をした八神に九城は説明をしたが・・・

「？ああ！そうか！お前ら、昔、俺とレイヴェニアの嫌がらせで一時間ほど生ゴミバケツに閉じ込められたのをまだ恨んでるんだな！」
「・・・いや・・・もういや・・・」

我が兄ながらこれで大丈夫か、と思うほどに的外れなことを言う八神を心配する九城。

「ええと、はなしもどして、ええか？」

気まずそうに話を戻そうとする勝呂

「ん、いいが」

まわりは、もうちょっと聞きたそうな顔をしているが八神が即答で答えたためあきらめた。

「まあ、八神と杜山さんは確実に合格やな！そうじゃなかったら俺ら全員落ちるわ・・・」

話を強引に戻した勝呂などを中心に雑談が続いていった。

「なあ、八神」

「何だ。燐」

二人は病室から出て話をしていた。

「さつきお前が言った、えーと・・・」

「Despair 611の事か？」

燐は八神に先ほどのことを改め聞いてきた。

「そう！それだ！それどいう意味なんだ？」

「『絶望と言う名の贈り物』だ。Despair単体では絶望だけなんだがな」

「へえー。カッケーなあ、なんか」

燐の言葉に顔をしかめる八神

「俺以外にそんな事言うなよ。これは覚悟でも、決意でも、戒めでも、とても大事な、名なんだ」

これは、俗に魔法名ともいわれている名でもあった。

エクソシスト被魔師全員がこれを持っているわけではなく、本当に大切な誓いを立てた者が持つ名でもあった。ただ訓練生でこれを持っているのは本当にまれなことであった。

「そ、そうなのか？悪かったな・・・なんか・・・」

「ああ、別にいいよ」

そんな話をしていく二人であった。

それから数日後

「無事全員候補生昇格・・・！おめでとうございます？」
ハトなどを出しながらそのことを告げる、メフィスト。

「お・・・おお~~~~しゃあ~!!」

「よ・・・よかった!」

「やった」

「まあ、当たり前だな」

これを聞いた元訓練生改め訓練生達は口々に感想を言っていた。
しかし・・・

「でもさー、これって母さんがこっちに来るんだよね」
九城の言葉に、八神と出雲は固まった。

「はい。先ほど砕さんにこの事を話したら、『夏休みにはそっち行くからい場所作つとけ!!!』と言われました」
メフィストが、やれやれとやりながら言う。

「い、いやでも俺はイギリスに行けばいいし・・・」
「なっ!? 逃げるんじゃないわよ!」
二人は何かを言っているが、候補生達は首をかしげた。

「ああ、彼女は私と同じ・・・砕さんは『名誉騎士』何ですよ」
なんかとてつもなく凄い事を言うメフィスト

「はあ!? 名誉騎士キャンサーって一人じゃなかったんですか!? いやそれ以上」

混乱する訓練生達エクソワイア

「ん? あーと、ではみなさん。魔銃について何か知っていますか?」
「そりゃあ、もちろん・・・」
竜騎士ドラクーン志望の勝呂が答えた、魔銃とは古くから研究されていた分野で、その目的は魔剣と同じく、悪魔を銃にも憑依させれるか。と言ったものであり、またこの数十年で実用的なものが開発されたものであった。

「そうです。そしてその魔銃の開発者が神木 砕さんなのです! その功績が称えられ正十字騎士團の名誉騎士キャンサーになったのです!」
あまりの事に周りはものも言えなかった。だがメフィストは続ける

「ちようどいい機会なので、正十字騎士團についても詳しく教えま

すね」

「ちょよ!? フェレス卿!? それは二年生の単目ですよ!?!?」
雪男が止めたが

「それもそうです。立ち話は流石になんですし、もんじゃでも食べながら話しましょう」

見当はずれな事を言っていた。

駄菓子屋

「えつとですね。まずは聖騎士パラディンに替えは効いても、四大騎士アークナイトには替えは効かないというところから話しましょう」
駄菓子屋で話を続けるメフィスト

簡潔にまとめるとこうだった。

四大騎士アークナイトからは聖騎士パラディンは生まれない。

これはおかしなことだった。普通は聖騎士パラディンが居なくなったら四大騎士アークナイトから誰かを引き上げるはずなのだ。

事実、実力はもちろんのこと権限、発言力、その他もろもろ四大騎士アークナイトのほうが聖騎士パラディンよりも上であった。

四大騎士アークナイトのメンバーは、

ローラスチュアート、ワシリーサ、マタイリース、そしてフィアンマの四人で構成されていた。

そして、ローラスチュアートは正十字騎士団十字教三大派閥の一角イギリス清教の最高司教アークビショップであり

また、マタイリースに至っては正十字騎士団十字教三大派閥の中でも特に威厳のあるローマ正教の教皇であった。

この二人にはいくらパラディン聖騎士であるつと下手に意見が言えないのが現状、またそのほかの二人に至ってもかなり特殊な人材であるために上の二人とほぼ同じ状況であった。
ちなみに、この人員は30年前から変わっていないそうだ。

「とゆうのが、アークナイト四大騎士です。いや彼らは、いくら私と言えども敵に回したら一日生きられるかどうか……」
あまりの事にボー然とするエクソワイア訓練生達。

「まあ、今日はこの話はここまでと言う事で、もんじゃを頼みましようー!」

そう言うと浴衣姿のメフィストは立ち上がり

「電話を少ししてきますね」と言っ出ていった。

「いや、おまんの母親凄い人やったんやな……」

「ん？凄いぞ。いろいろな意味で……」

勝呂が八神に話しかけていたが

「いや、本当にすごいわよ。高校生って言っても通じるくらい若作りしているし」

出雲が八神の言っていたいろいろの一つを打ち明かした。

「そーいや、私が小1の事から29歳って鯖読み続けてるよね。誰も疑わないし……」

さらに九城が続く

「とゆうか、二カ月に一度、イギリスに行く金をよこしてくれるけど、あれってどうやって手に入れてるんだ？働いてる姿なんか見た

「ことも無いのに」
さらにさらに八神が続く

「……いや、ホンマ凄いな」
勝呂が、これ以上聞いていたら、どうかしそつだと思つたのか話しを終わらせた。

「そついや、八神君。君の許婚つてどないな人なん？」
次に志摩が八神に問いかけてきた。

「写真あるけど見るか？」

「……もしかして肌身離さず持つてるわけ？」

ポケットから写真を取り出す八神に出雲は思わず問いかけた。

「？、そつだが？」

八神の言葉にもついやと言いながら、頭を抱える出雲と九城

「八神君。見して見して」

「ほい、汚したらぶち殺すからな」

「わかつとるつて」

そつして写真を見る志摩。ついでにはかの訓練生達エクソライアも覗き込んでいた。

そこに映っていたのは金髪碧眼の美少女であつた。

「ブハツ！！ふ、普通に美人や！！！？え？許婚ちやうん！？」

「わゝ、かわいいこの子何歳？」

「同い年だが？」

しえみの問いに、訳が解らないというような顔をしながら答える八神。

「……いや、でもこれ……異様に露出少くないか？顔以外は素肌だるように見えんし……」

「ああ、それはレイヴェニアちゃんが『八神以外に顔以外の素肌を見せるだなんて、考えただけでも吐き気がする』とかいって、真夏でもレースの手袋にストッキングとか着用してるんだよ」
普通は手ぐらいは見せてもいいのに、と言いながら頭を抱える九城。

「とゆうか、二人が一緒にいるときなんか見るに堪えないわよ。どこでもかしくでもいちゃつく上に、二人ともDSで、・・・今までどれほどの罫にはまってきた事か・・・」
何かを思い出したかのように頭を抱え始める出雲。

そうこうしているうちに、日も暗くなりみんな帰っていった。

おもひで（後書き）

はい、とある魔術の禁書目録の登場人物だの、世界観だのがいろいろ出てきましたね。

レイヴェニア「バードウェイはとあるの世界より少し大きくした感じのを想像して頂ければ幸いです。

たぶん明日も投稿すると思います。

そしてこれからは、もっと、とあるの世界観が派手になっていく予定です。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

感想本当にください！！なんか一週間放置していたのに感想一件も来なくてちよつとがっかりした、超子供な作者ですから感想ください！恵んでください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5922x/>

転生者の祓魔師

2011年12月3日00時49分発行